



28

世界文学全集

八月の光

フォークナー／加島祥造訳

世界文学全集 28

八月の光

ウィリアム・フォークナー

訳者 加島祥造

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／凸版印刷株式会社 製本所／大口製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／中田製函株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

八月の光

..... 3

ウィリアム・フォークナー

..... 407

Light in August

by

William Faulkner

八
月
の
光

(一) 訳文におけるゴシック体は、おもに意識のなかを流れる言葉の諸相を表わしています。原文はイタリック体で表わされ、もつと軽い字面の印象ですが、日本語の活字にはそれと似たものがないので、やや重くて強い感じのゴシック体活字にしました。

(二) 訳文では「が普通の会話を表わし、『はおもに作中人物の思考の働きおよび、語る人の言葉のなかに更に別人の会話が挿まれた時に使われています。

(三) 訳文における現在形と過去形は原文のとおりになっており、この區別を確認して読むと、作品の時間的変化を知る助けになると思います。

なお以上の三つの点については、解説でさらに詳しく述べられています。

(例) 文中に出てくる地名およびジェファスンの町については、巻末に地図を付しました。

1

道端みちばたに坐まつて、馬車ばしやが丘を登のぼつてくるのを見まもりながら、リーナは考える、『あたしアラバマからやってきたんだわ。アラバマからずっと歩いて。ずいぶん遠くまできたのねえ』。考えはさらに走はしつて旅に出てからひと月とたたないのにあたしもウシシビイ州にいる、こんな遠くとほにきたのは生れてはじめて。あたしが十二の時に家うちからドーンドーンの工場に移うつつた時よりもっと遠くとほにきている

そのドーンドーンの工場に移うつつたのさえ、彼女が父母に死なれてから後のことなのであった、もっともその前にも年に六、七度は土曜日には町へ馬車ばしやで出かけたもので、その時の彼女はいつも郵便注文の服を着て裸足はだしの両足を床に平たくのせ、靴は紙に包んで座席のわきに置いて乗のつて行き、馬車ばしやが町につく前になると靴をはくのだった。やや大きくなつてからは、父に頼んで町の端で馬車を停とどめてもらい、降りて歩きだしたもの

だった。自分がなぜ馬車ばしやに乗りつづけずに歩きたがるのか、彼女は父に話さなかった。それは道路や舗道が滑らかなせいでろうと父は思った。しかし本当は、歩いてゆけば自分を見たり行きがちがったりする人々が自分をやはり町の者だと思ふにちがいない、と信じたためであつた。

十二歳になつた時、彼女は父と母を同じ夏のうちに亡くしたのだが、二人の死んだのは三部屋と内玄関しかない丸太造りの家のひと間で、虫の飛びまわる石油ランプに照らされたむき出しの床は裸足はだしで歩くために古い銀のように光っていた。彼女は末娘であつた。先に母親が死んだ。母親は言つた、「おとっさんの看病をしておくれ」。リーナはそうした。ある日父親は言つた、「おまえはマキンリとドーンドーンの工場へゆくんだよ。仕度しどをしておき、彼がくる前に仕度しどをしておき」。それから父が死んだ。彼女の兄のマキンリは馬車ばしやで到着した。二人はある午後ごに教会の裏の茂みに父を埋め、松の木で墓標むふしを作つた。翌朝、彼女はマキンリと共に馬車ばしやでドーンドーンの工場へ向けて永久に、いやその時の彼女は永久には知らなかったが、この土地を立ち去つた。馬車ばしやは借り物で、兄はこれを夕方までに返さね

ばならなかったからである。

兄は製材工場で働いていた。その村のものはみんな製材工場かそれに関した仕事で働いていた。松を切りだす仕事であった。それはすでに七年間もつづけられていて、あと七年もすればこのあたり一帯の松材はすっかり切り倒されるであろう。そして機械のうちの幾つかと工場やそれに関係した仕事で働いてきた連中のほとんどは貨車に乗せられて移動してゆくだろう。ただし、どこでも新品が月賦で簡単に買えるような機械類は後に残される——じっと見凝めるように動かぬ輪の類はまた無気味にひどく驚愕したという感じで煉瓦の破片やもつれた雑草の間から身をのぼし、ぱっくり割れたボイラーはその錆びて煙の出ぬ煙突を頑固そうに上方へ突き立て、それらが呆然と物思いに耽るようにとり残されたあたりの大地は凄まじい静かな荒廃の姿のままに、鋤もはいらず耕されることもなく秋の長雨や春の奔流によって次第に削られ、赤くて浅い谷にと化してゆくのだ。やがてどんな連中が勝手に建物を引き倒してその木材を台所のストーヴや冬の炉で燃やしてしまうころには、栄えた時でさえ郵政局年鑑に名前の載らなかったその村は、こうした連中にさえ

も忘れられてしまうのである。

リーナが到着した時そこには五家族ほどが住んでいた。鉄道と駅があり、一日に一度だけ貨客混成列車が叫びをあげながら走りすぎた。汽車は赤旗をあげれば停まったが、たいていは荒れた丘のかげから亡霊じみた突然さで現われ、バンシー（訳注 死人の出た家の外）のように叫びをあげて、珠数の切れて飛び散った玉の一粒さながらのこの小さな塊りの村落を斜めに横ぎって過ぎ去っていった。兄は彼女より二十も年上であった。一緒に住むことになった頃には、彼女はむかしの兄をほとんど覚えていなかった。兄はペンキも塗らぬ四部屋の家に仕事と出産にとりつかれた妻と暮していた。この義理の姉は一年の半分为ベッドで出産を待つか回復を待つかして寝ていた。その間ずっとリーナは家事をやり、他の子供たちの世話をした。後になって彼女はこう独り言をしたものであった——『あたし、子供たちの世話ばかりしてたもんで、自分もこんなに早く出来ちまったんだわ』

彼女は家の裏側の差掛け部屋に寝ていた。そこには窓がひとつあり、彼女はそれを闇のなかで音のせぬように開けてまた閉めることを覚えた——その部屋

にははじめはいちばん年上の甥が、次には二番目の、最後には三番目の甥と一緒に寝るようにさえたが、そうした八年間がすぎたから彼女ははじめてみずから手で夜中にその窓を開けたのであった。しかしそれを十二回も開けぬうちに彼女はたちまちそんなことをするのではなかったと悟ったのであった。彼女は独り言した、『あたしって運が悪いんだわ』

義理の姉が兄につけた。彼は、もう少し前に気付くはずの妹の身体つきの変化に目を向けた。彼はきびしい男だった。柔らかさ優しさ若さと（彼はちょうど四十歳だった）そのほかのほとんどすべてを汗と共に流し落してしまっていて彼の体に残ったのは頑固でひたむきな我慢強さと自分の血統へのわびしい誇りだけだった。彼は妹を淫売と罵った。彼は相手の男を誤またずに推定して悪口を言った（村には若い独身者、いわばおが屑かぶりの女蕩など村の家の数よりも少ないのだ）。しかし彼女は、男がもう六カ月も前に立ち去っていたにもかかわらず、兄の非難に承服しなかった。ただ頑固にくり返して、「彼はあたしに迎えをよこすわ。迎えをよこすって言ったんです」、——あのルーカス・バーチ型の男が、いざとなると姿をくらますく

せに、それまではいかにも頼りがましく振舞うのを、全く信じきった小羊さながらの素直さで、彼女はかたくなに言うのであった。二週間後、彼女はまたあの窓をのぼって抜けだした。今度はかなり骨がおれた。『前の時にもこんなに骨がおれたのだったら、あたしいまさらこんなことせずにすんでるのに』と彼女は思った。彼女は昼間、玄関から立ち去ることもできたのである。誰もそれを止めはしなかったらう。たぶん彼女はそれを知っていた。しかしそれでも夜中に窓から出てゆくほうを選んだのであった。持ち物は一本のシュロ葉の扇とバンドナ（訳注 大型のハンカチ）できちんとした小包みだけだった。なかには他のもののほかに小銭で三十五セントがはいっていた。靴は兄にもらった男物だが、履き古されてはいなかった、というのも夏場には兄も妹もたいてい裸足で暮らしていたからだ。彼女は自分の足が泥の道路を踏むのを感じると、靴を脱いでそれを手にもって歩きだした。

いま彼女はそんな姿では四週間の旅を過してきていた。彼女の背後のその四週間——遠くまで来たという思いを呼びおこすその実体は——平穩な長い廊下になり、その床は揺がぬ平靜な信念で固められ、左右は

親切な名もない顔で飾られて、そして幾つもの声が残っている——ルーカス・バーチ？ 知らんね。このあたりではそんな名もの知らんね。この道かい？ これはボカホントス（訳注アーカンソー州北部の町）へゆくのか。その人はそこにいるかもしれない。あるいはな。この馬車はそっちのほうへちつとばかり行くよ。まあ乗ってゆきなよ——彼女の背後に

のびているのは昼から夜へ、夜から昼へと単調に移り代る長い平穏で相も交らぬ道で、そのなかを彼女は誰のものとも知らぬ同じようなのろい馬車を乗りついで進んできたのであり、それらは車輪をきしらせてのっそりと行く魔物の行列のようであった、彼女は大きな壺の周りを永久にはかどりもせずに進む何ものかのようであった。

馬車は彼女のほうへ向って丘を登ってくる。彼女はそれを一マイルほど手前ですでに追いついていたのだった。その時の馬車は道端に立っていて、らばどもはぼんやり眠りこけた頭を彼女のゆく方角へ向けていた。彼女はそれを見だし、また垣の向うの納屋のそばに二人の男がしゃがみこんでいるのを見た。彼女は馬車と男たちを一度見やったきりであった——漠然と素早くすべてを包みこむ無邪気な視線。彼女は足をとめ

なかつたし、垣根の向うの男たちも彼女が馬車や彼等に目を向けたのさえ気づかなかつたろう。それに彼女は振り返りもしなかつた。靴ひものほどけたままの足をゆっくりと運びながらその場を立ち去り、やがて一マイル向うの丘の上に達した。それから溝のふちに腰をかけ、靴をぬいでから浅い溝のなかに両足をおろした。しばらくすると馬車の音が聞こえはじめた。彼女はすこしの間それに耳をかたむけた。やがて馬車の登ってくる姿が目にはいつてきた。

古びて油の切れた木部と金属の出す短く鋭いガタピシという音はゆるくすさまじく——乾いてのろのろと続きながら、それらが八月の午後の暑くて静かで松に覆われた沈黙（しじま）のなかを半マイル向うから伝わってくる。らばどもは単調で夢うつな足どりのなかで、馬車はほとんど進んでいないようにみえる。進み方があまりに微細なもので、途中でいつまでも宙ぶらりんに止まっているような、まるで薄赤い道路の帯にのつた一個のつまらぬ玉といった感じだ。その感じは非常につよくて、見つめるうちに馬車の姿はうすれて視力と感覚はうっとりといつしか昼夜のあの単調で平和だった幾日かと融け合い、道路自体もまたすでに長さを

計られた糸がいま糸巻きに巻き返されているかのようになる。やがて馬車の音さえ、まるで距離も感じられぬどこかつまらぬ遠い領域から、ゆっくりと恐ろしく意味もなく伝わってくるといったふうで、まるで自分自身の姿の半マイルも前をやってくる幽霊に似てくる。『あたしに見えないうちに、もうあんな遠くから聞こえてくるわ』リーナは考える。彼女はもうその馬車に乗ってまでも動いてゆく自分のことさえ思い、考える。するとまるであたしはあの馬車にのりもしない内にもう半マイル前から乗っているわけだわ、あの馬車があたしの待っているここに着きさえしない内からあたしは乗っているわけだわ、そしてあの馬車はあたしを降ろした後でもやはり半マイルはあたしを乗せてゆくことになるんだわ 彼女はいま馬車を見まもりもせず待ちながら、その間も思考は氣儘に素早く滑らかに流れ、そこに名もない親切な顔と声がいくつも群れてくる——ルーカス・バーチ？ あんたボカホントスも搜したわけかね？ この道？ これはスプリングヴェール（訳注 ジョージア州西部の町）へゆくんだ。あんたここで待ってなさいよ。そっちの方角へゆく馬車がじきにここを通るからね。乗せていってもらいなよ 彼女は考える、『それにもしあの馬車がジェファスン（訳注 ミシシピ州にあるとする架空の町）

までずっと行くのなら、ルーカス・バーチがあたしを見る前にあたしは彼に聞こえるところまで乗ってゆくことになるわ。だって彼はあたしのことは知らなくともあの馬車の音は聞くもの。だから彼が見ない前から、もうひとり別のあたしが彼のなかにはいつてゆくわけだわ。それから彼はあたしを見てとても喜ぶんだわ。だから彼の気づかない前に彼の目には二人のあたしが現われるわけだわ』

アームステッドとウインタボトムはウインタボトムの馬小屋の涼しい影にしゃがみこんでいて、彼女が道路を通りすぎてゆくのを見た。女が若くて、みごもっていて、他国者（よこもの）なのを二人ともすぐに見てとった。『あの女、どこであんな腹になったのかな』とウインタボトムが言った。

「あれをかかえて、どれぐらい遠くから歩いてきたのかな」とアームステッドが言った。

「この道のむこうにいる誰かを訪ねてきたんだろうよ」とウインタボトムが言った。

「そうじゃなからう。そうならおれの耳にもう話はいつてるはずさ。それにおれの家までは一軒も家はね

えよ。先のほうのことだつて、おれの耳にはいらあな」
「あの女は自分の行く先を知ってるな」とウインタボトムは言った、「そんな歩きぶりだ」

「彼女、あんまり先へゆかん内に、道づれを見つけることになるさ」とアームステッドが言った。女はいま、誰の目にもつくふくらんだ腹をゆすつて通りすぎていた。褪せた青色のだぶつく服で手にはシュロ扇と小さな布包みひとつを持ち、行きすぎる時にはほんのちらっと二人を見やったのだが、二人ともその視線には気づかなかつた。「あの女はこの近くからきたんじやあないぜ」とアームステッドは言った。「あの歩きぶりだともうよっぽど長いこと歩いてきてるな、それにまだよっぽど行かなきゃならんようだぜ」

「いや、このあたりの誰かを訪ねにきたにちがいねえよ」とウインタボトムが言った。

「それならおれの耳にはいつてゐるはずさ」とアームステッドは言った。女は歩き去つていった。後を振り返らなかつた。女は道路のむこうにみえなくなつた——ふくらんだ腹で、ゆっくりと、丹念に、急がず我慢つよく、まるで移りゆく午後の陽差しそのもののような進み方で歩いていった。やがて女は二人の会話から

も、そしてたぶん頭の中からも消え去つたらしい。というのはずがアームステッドは前から言おうとしていたことを口にしたからである。彼は以前にも二度こへ、五マイル向うから自分の馬車に乗つてやつてきて、ウインタボトムの馬小屋の涼しい影に三時間もしやがみこんで、つばを吐いたりしながら、彼等特有ののんびりした遠まわしの言い方で話しこんだものだ。話というのはウインタボトムが売りたいという耕耘機こつらんについてその値段を言いだすことだつた。しまいにアームステッドは太陽を見あげ、そして三日前にベッドで寝ながら決めた値段を口にした。「ジェファスンにもひとつこれと同じ値で買えるのがあるのさ」と彼は言つた。

「じゃあそつちのを買つたらいいだろ」とウインタボトムは言った、「えらく安い買物になるぜ」

「そうさ」アームステッドは言った。つばを吐いた。彼はまた太陽を見あげ、そして立ちあがつた。「さてと、家へ帰ることにするか」

彼は馬車に乗りこみ、らばどもを起した。いや、彼らはらばどもを動かしたと言ふべきだ、というのらはらばが眠っているかどうか分るのは黒人だけだからだ。ウ

インタボトムは後からついてきて、垣の上に両腕をおいた。「そうとも」と彼は言った、「おれだったらその耕耘機がそんな値なら買っちゃうぜ。もしあんたが買わねえんなら、ほんとにおれは手に入れるかもしれないぜ、その値ならな。どうやらその機械を持ってるやつは、つがいのらばを五ドルぐらいで売りたいなんて人間じゃあねえかい、ええ？」

「そうとも」アームステッドは言った。彼は馬車を動かし、それはゆっくりと果しない音をたてはじめた。

彼もまた振り返らない。といって前方を見つめているわけでもないらしい、というのは馬車がほとんど丘の上に着くまで道端の溝に坐っている女に気づかなかつたからだ。青い服に目をとめた瞬間さえ女が自分や馬車をすで見ているのかどうか分らない。また彼のほうも前にこの女を見かけていたことをその様子からは誰ひとり察しえないにちがいない、両者ともついさつきすれ違った様子など全くみせず、ゆっくり互いに接近しているのだ、馬車はいかにものろく眠たげな雰囲気と赤っぽい埃につつまれて彼女のほうへあのひどい音をたてて這い、らばどもの着実な足どりは、引き具の時おりの音と兎じみた耳のしなやかな揺れに合わせ

て夢じみた正確な動きをつづけ、らばどもがまだ眠っているのか覚めているのか分らぬままに彼は馬車を停める。

洗濯石鹼や水のほかにいまは風雨によっても色褪せている青い日除け帽の下から、彼女は静かに明るく相手を見あげる——若くて、感じよく、率直で、物おじせず、そして用心ぶかい顔だ。女はまだ動かない。同じように風雨にさらされて色褪せた服の下で、女は不格好な身体のままに動かない。扇と包みがその膝にのっている。靴下ははいていない。剃きだしの脚は並んで浅い溝のなかに置かれている。傍の埃だらけの重くて男物らしい靴もやはりじっとしている。停まった馬車のなかではアームステッドは背をかがめ、白茶けた目付で坐っている。彼は扇の縁が日除け帽や服と同じように褪せた青い布できちんとかかれているのを見とる。

「あんたどこらまでゆくね？」と彼は言う。

「暗くなる前にあたし、この道をもうすこし先までゆこうと思って」と彼女は言う。彼女は立ちあがり、靴をとりあげる。ゆっくりと用心ぶかく道路へあがり、馬車へ近づいてくる。アームステッドは降りて女を助

けあげようともしない。ただらばどもをしっかり止める。その間に彼女は重たげに車輪をこえて登り、座席の下に靴を置く。馬車が動きだす。「有難う」と彼女は言う、「歩いてきて、とてもくたびれたの」

たしかにアームステッドはこれまで一度も女をゆっくり見つめたりしていない。それなのに彼は女が結婚指環をはめていないのをもう見てとっていた。彼は女のほうを見ようともしない。ふたたび馬車はゆったりした軋（ゆ）り方をはじめ。「どれほど遠くから来たんだね？」と彼は言う。

彼女ははっと息を吐く。溜息というより平穏な深呼吸にちかく、いわば静かな驚きからさめたともいうようだ。「とっても遠くに思えるわ、いまになると。

あたしアラバマ州からきました」

「アラバマ？ その身体で？ あなたの家族はどこにいるのかね？」

彼女もまた男のほうを見やらない。「この道の先にあの人がいると思うんです。あなたが知ってるかもしれないせんわ。名はルーカス・バーチです。来る途中で、彼がジェファスンにいらって教わったんです、製板工場で働いているって」

「ルーカス・バーチ」アームステッドの口調はほとんど彼女と同じだ。二人は並んでスプリングのこわれて凹んだ席に坐っている。彼は女の膝にのせた両手と日除け帽の下の横顔を見ることができ、目の隅から彼はその横顔を見る。女は、らばどものしなう耳の間から向うへ延びてゆく道路を見まもっているようだ。「で、あなたはその男を尋ねて、ずっとここまで歩いてきたわけかね？」

彼女はちよつと返事をしない。それから言う、「みんな親切にしてくれたわ。とても親切にしてくれた」「女連中もかね？」目の隅から彼は女の横顔を見まもつて、考える。マーサがどんなこと言いだすか見当もつかんわい。考えて、『いやマーサが何て言うか察しはつくな。どうも身持ちのいい女にかぎってあまり親切なのはおらんもんだ。男は、まあ、そうでもないが。ほんとに困ってる女に親身で親切にしてやるのは自分自身も悪い女にかぎるな』考えて うんそうとも、おれはマーサが何て言うかよく知ってるのさ

女はやや前かがみに坐って、じっと動かず、その横顔も、頬も、じっと静かだ。「女のひとはちがうわ、妙なことね」と彼女は言う。

「あんたみたいな身体した見知らぬ若い女が道を歩いてるのを見たって、まさかその女が夫に置きざりにされたとは誰も分らねえだろうからな」。彼女は動かない。いま馬車はある種のリズムを帯び、その油気の無い苦しげな木部の音はゆったりした午後、道路、暑さと一体になっている。「で、あんたは彼をこの先で見つけるつもりなんだね」

彼女は動かない、らばの耳の間から、ゆるい道路の、たぶん曲った果にある行く先までの距離に気を奪われているかのようだ。「彼は見つけれられると思うの。難かしくないわ。人が多く集まるところに、そして笑ったり冗談いったりしてるところに彼はいると思うの。彼はいつもそんなことが好きだったわ」

アームステッドは鼻を鳴らす——無愛想でぶっきら棒な音だ。「ほれ、目を覚ませ、馬ども」と彼は言う、それから意識の流れとつぶやきの間あたりの調子で、独り言をする、「まあこの女なら見つかるだろうな」。

どうやら男のほうはアーカンソー州のこっち側でうろついていたのを後悔する運命だな、いやテキサス州にいったとしたってそうさ」

陽は傾いている、素早くくる夏の夜を一時間後にひ

かえて、陽は地平線の上にかかっている。道路から小道が曲りこんでいる——道路よりもお静かな小道だ。「さあ着いた」とアームステッドが言う。

女はすぐに動く。身をかがめて靴をとる、靴をはいたりして馬車がまた動くのを手間どらすまいと気を配っているのだ。「ほんとに有難う」と彼女は言う、「とても助かったわ」

馬車はふたたび停まる。女は降りる仕度をする。「あんたが暗くなる前にヴァーナーの店へ着いたってそれからジェファソンまでまだ十二マイルはあるぜ」とアームステッドは言う。

彼女は靴と扇と小包みを片手にぎこちなく持ち、もう一方の手では自分を支えておりようとしている。「あたし、とにかく先にゆくほかないんです」

アームステッドは彼女に触れもしない。「あんた家^{うち}にきて今晚は泊りなよ」と彼は言う、「家^{うち}なら女衆^{おんなしやう}は——女は……もしあんたが——まあおいで。明日の朝さっそくにヴァーナーの店に送ってやるからよ、それから町へいったらいいさ。土曜だから誰かがゆくさ。その男はひと晩でどこかに逃げやせんだろ。もし彼がジェファソンにいるんなら、明日だっているさ」

彼女は降りようとして品物を手にかかえたまま、じつと静かに坐っている。彼女は前方を見ている、幾つもの影の斜めに落ちかかる道路が向うへ曲りこんでゆくのを見ている。「そんなに急ぐことはないと思うけど」

「そうとも。まだたっぷり時間があるさ。もっとも、あんたは、歩けない連れがいつとびだすか分らん身体だけれどな。さあ家へおいで」。彼は返事を待たずに、らばどもを動かす。女は、まだ扇と包みと靴を手にかかえたままだが、また元のように坐りこむ。

「あたしご迷惑かけたくないわ」と彼女は言う、「面倒かけないようにするわ」

「まあいいさ」とアームステッドは言う、「おれと一緒ににくればいいよ」。はじめてらばどもは勢づいて早く動く。「トウモロコシのにおいをかぎやがったな」とアームステッドは言い、考えて、『だがこりゃあ女も同じだな。自分のこととなりゃあ、姉っこでもだしぬいて平氣の平左で国じゅう歩きまわるんだ、というのもみんなが、男たちが、親切にしてくれると知っているからだ。彼女は女連中にや気を止めなかったんだ。自分じゃあ欺だまされたときえ思わねえ羽目はめに彼女を追

こんだのは男のほうだったんだからな。そうだと。女が結婚するか結婚せずに男をつくるかしてみろ、たちまち女らしさなんかおっぼり出して、あとはもう男のまねごとをしようと血まなこになるのさ。女が嗅かぎたばこをつまんだり、たばこ吹かしたり、投票したがつたりするのもそのせいさ」

馬車が家をすぎて馬小屋の前の空地へゆく時には、いつも彼の妻は玄関のドアからそれを見まもっている。彼はその方角を見ない、見なくともそこに妻がいるだろう、いるに違いないと知っている。『うん』、彼は開いた門へらばどもの頭を向けながら皮肉めいた惨めさとともに考える、『あれがどんなこと言うか知ってるさ。まずおれにはすっかり分ってるのさ』。彼は馬車を止める、彼には細君がいまは、自分を見はってはいないで、台所にいると知っている、見て確かめなくとも分っている。彼はもう降りていて、今度は女のほうがあの内うち部の声を聞きすますような慎重さでゆっくり降りる。「あんた先にゆきな、誰かに会ったら、それがマースというわけさ。おれはこいつらに食わせてからゆくよ」。彼は女が庭を横切ってゆくのを見送らない。そんなことをせずとも分っているのだ。頭の